

〔課題演習報告〕

育ちと学びをつなぐカリキュラム・マネジメントに関する研究
—スタートカリキュラムプロジェクトチームの推進を中心に—

岡 村 恵
Megumi OKAMURA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻学校運営リーダーコース
福岡市立赤坂小学校

(2020年1月6日受理)

本研究は、幼児期の学びから小学校教育へと円滑な接続を図るスタートカリキュラムが、小学校6年間のカリキュラム・マネジメントの土台として学校全体で考えることができるように、プロジェクトチームを組織運営し、育ちと学びをつなぐ視点からカリキュラム・マネジメントの在り方を明らかにしていくことを目的としている。そのために、スタートカリキュラムプロジェクトチームを3つの部会（カリキュラム部、特別支援・地域連携部、保幼小連携部）で役割分担しながら、スタートカリキュラムのPDCAサイクルに沿った計画的な推進を行った。また、スタートカリキュラムの評価・改善を保育園・幼稚園と連携して行うことができるように、育ちと学びをつなぐ視点から保幼小連絡会や合同研修会を実施した。このことから、保幼小が互いの保育・教育内容の理解を進め、繋がりを意識したカリキュラム・マネジメントの在り方が明らかにできた。

キーワード：カリキュラム・マネジメント、スタートカリキュラム、保幼小の連携・接続体制
保幼小連絡会、保幼小合同研修会

1 主題設定の理由

(1) 国及び福岡市の動向から

平成29年3月に改訂された学習指導要領の第I章総則「4 学校段階等間の接続」において、幼稚園・保育園等と小学校の接続について示されている。これまでは、小1プロブレムなどの問題を解決し、学校生活への適応を進めることを接続の意味と捉えていたことから、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かう姿を接続するといった積極的な意味合いが込められている。また、入学当初の指導計画であるスタートカリキュラムは、学校生活への適応にとどまらず、各教科等への接続をも果たすものと示されている。ここでのスタートカリキュラムは、小学校1年目のスタートラインではあると同時に、小学校6年間のスタートラインでもあるため、全職員で学校の教育ビジョンを共有する中で、スタートカリキュラムを作成（P）、実施（D）し、児童の姿を通して評価

（C）改善（A）を学校全体で計画的・組織的に行っていくことが重要だと考えた。

また、平成22年11月、幼児期の教育と小学校の円滑な接続の在り方調査研究協力者会議の報告において、これからの保幼小接続の在り方を、以下の3点から述べられている。

- 幼小の教育の目標を「学びの基礎力の育成」という1つの繋がりと捉えた、幼小が共有できる接続カリキュラムの必要性
- 幼児期と児童期の教育活動を繋がりで捉える工夫として「学びの自立」「生活上の自立」「精神的な自立」の三つの自立の視点を、接続期のカリキュラム（本研究でのスタートカリキュラム）の柱として考えていくこと
- 幼小接続の取組を進めるための連携・接続の体制づくり

このことにより、保幼小それぞれの保育・教育課程の関係を明確にし、それを踏まえた教育方法を実践することが求められていると考える。

福岡市では、平成 21 年度から「新しいふくおかの教育計画」において、保幼小中連携が 15 年間の育ちを見通して、発達や学びの連続性を踏まえた指導を支える連携となるよう取り組んできた。このことを受けて、平成 31 年 3 月『保幼小中連携教育推進の手引き』が出され、15 年間の育ちの姿を共有するとともに、中学校ブロックを中心とした自主的・自律的な連携を重視していくようになった。これらの連携のためには、子ども同士の交流のみならず、教員間交流での情報の共有や研修会の実施による相互理解が重要と考える。

(2) 在籍校の実態から

在籍校は、児童数 479 名、学級数 19 学級（特別支援学級 2 クラスを含む）の中規模校である。平成 30 年 3 月まで公立幼稚園が隣接しており、校長が園長を兼任していたこともあって、生活科新設の時から幼小連携教育を積み重ねてきた。

しかし、スタートカリキュラム作成が、主幹教諭や低学年に任せきりになっている現状にあった。1 年次の調査研究において、低学年の担任の経験の有無やスタートカリキュラム作成に直接関わることがなければ、スタートカリキュラム認知度は低いという結果が得られた。このことから、スタートカリキュラムが小学校の教育の土台として、学校全体で共通理解して取り組んでいくものであるという教員の認識には至っていないということが推察できた。

また、毎年 20 園以上の保育園・幼稚園から入学してくる状況にあり、入学してくる子どもの保育経験を十分理解することまではできていない状況にあった。文部科学省(2015)「幼児教育実態調査」では、各学校と施設が連携から接続へ発展する過程を共有し、組織的・計画的に取り組むことが必要であると述べられ、連携から接続へと発展する過程のおおまかな目安が示された(表 1)。

表 1 連携から接続へと発展する過程(文部科学省 2015)

ステップ 0	連携の予定・計画がまだない。 (今後の見通し) 職員研修会等で保幼小連携の重要性を理解する。連携・接続する学校・施設を確認し、連絡を取り合う。
ステップ 1	連携・接続に着手したが、まだ検討中である。 (今後の見通し) 各学校・施設に担当者を置き、定期的に意見交換会を開催する。意見交換の中から、交流事業、行事などを企画・実施し、子ども同士や職員同士の交流を推進する。
ステップ 2	年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育・保育課程の編成や実施は行われていない。 (今後の見通し) 授業、行事、研究会などの交流を年間指導(行事)計画などに位置付けて実施する。さらに、事後の反省・検証を行うことで次につなげていく。
ステップ 3	授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育・保育課程の編成・実施が行われている。 (今後の見通し) 恒常的な授業、行事、研究会などの交流に発展させる。連携の実践を踏まえ、接続を見通した教育・保育課程を編成・実施する。
ステップ 4	接続を見通して編成・実施された教育・保育課程について、実践結果を踏まえ、更によりよいものになるよう検討が行われている。 (今後の見通し) 接続を見通した教育・保育課程を編成・実施するとともに、学年末ことや年度末に事後に反省・検証を行うことにより、PDCA サイクルを確立し、次年度以降の改善につなげる。

在籍校の中学校ブロックには、私立幼稚園 3 園と保育所・保育園 3 園があり、保幼小連携の取り組みの状況は、この表によるステップ 2 の状況にある。ステップ 3 から 4 へと発展できるように、保幼小連絡会や合同研修会を計画していく必要があると考え、本主題を設定した。

2 研究主題・副題の意味

(1) 「育ちをつなぐ」とは

渡邊(2017)によると、スタートカリキュラムでは、「子ども理解」「活動の充実」「環境整備」がポイントであり、さらに 5 歳児保育の環境構成が充実することにより、滑らかな移行が可能になると述べている。このことから、育ちをつなぐとは、「子どもの成長の姿やこれまで育ってきた生活背景や環境(教育を含む)を理解し、つなげていくこと」とする。

(2) 「学びをつなぐ」とは

質の高い幼児教育と学びの芽生えとの関連を検討した角谷ら(2014)の研究は、幼児教育における遊びの経験が、「感情の自己調整」「言語力の基礎」「数量概念の基礎」など、小学校以降の教科の学びに繋がり、その基礎となる可能性を示唆している。そこで、学びをつなぐとは、「子どもの様々な活動における体験的な学びの芽生えを小学校以降の教科における自覚的な学びにつなげていくこと」とする。

(3) 「育ちと学びをつなぐカリキュラム・マネジメント」とは

本研究における育ちと学びをつなぐカリキュラム・マネジメントとは、次の 3 つの側面からマネジメントすることと捉える。

- スタートカリキュラムと各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育内容を組織的に配列すること
- 教育内容の質の向上に向け、子ども達の幼児期からの育ちや学びを連続・発展的につないだ教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る PDCA サイクルを確立すること
- 教育内容や教育活動に必要な人的・物的資源等(外部の資源も含む)を活用しながら効果的に組み合わせること

(4) 「スタートカリキュラム」とは

平成 20 年の「小学校学習指導要領解説生活編」の中で、幼児期の学びから小学校教育への円滑な接続を目的としたカリキュラム編成の工夫として

スタートカリキュラムが示された。また、「スタートカリキュラム スタートブック」(文部科学省 2015)には、小学校に入学した子どもが、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通じた学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラムと明記されている。スタートカリキュラムとは、「小学校に入学した子どもがスムーズに学校生活へ適応していけるように編成した第1学年入学当初のカリキュラム」のことである。

(5)「スタートカリキュラムプロジェクトチームの推進」とは

スタートカリキュラムプロジェクトチーム(以下、スタートカリキュラムPTと示す)とは、「在籍校の実態を受け、保幼小連携担当者だけでなく、主題研究を推進している研究部や特別支援教育委員会と連携した組織」である(図1)。既存の校務分掌を活用して、スタートカリキュラムPTをカリキュラム部会、特別支援・地域連携部会、この二つの部会と保育園・幼稚園をつなぐ保幼小連絡部会で組織し、役割を明確にしていくことで、学校全体での取組につながると考える。部会ごとには、コーディネーター(以下、Co.と示す)を位置づけ、Co.を総括していく役割を教頭として、進捗状況などを把握していく。

つまり、スタートカリキュラムPTの推進とは、「これまでの保幼小連携の在り方を見直し、スタートカリキュラムの実施を学校全体の取組として課題や目標を共有したり、教科や学年を超えた教員の協働性を創出したりしていくよう組織的に機能していくこと」である。

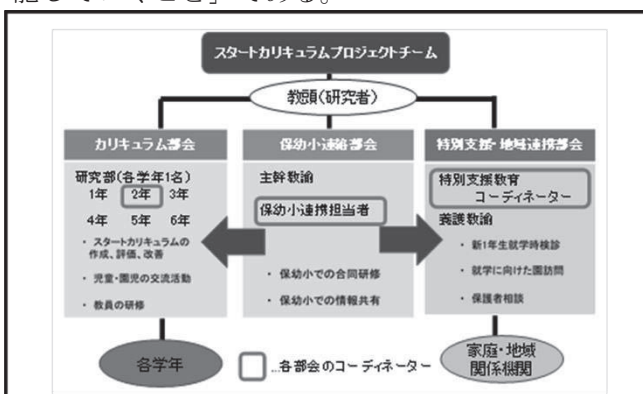


図1 スタートカリキュラムPT組織

3 研究の目的

スタートカリキュラムPTの推進を通して、育ちと学びをつなぐカリキュラム・マネジメントの在り方を究明する。

4 研究の仮説

スタートカリキュラムPTの推進を以下の3点から行えば、育ちと学びをつなぐカリキュラム・マネジメントができるであろう。

- 学校全体での取り組みにつなぐキャリア教育と生活科・総合的な学習の時間の視点からのスタートカリキュラムの見直し
- 育ちと学びをつなぐスタートカリキュラムのPDCAのための保幼小連絡会の運営
- 保幼小の教員同士が教育内容の理解促進するための相互参観と研修会の実施

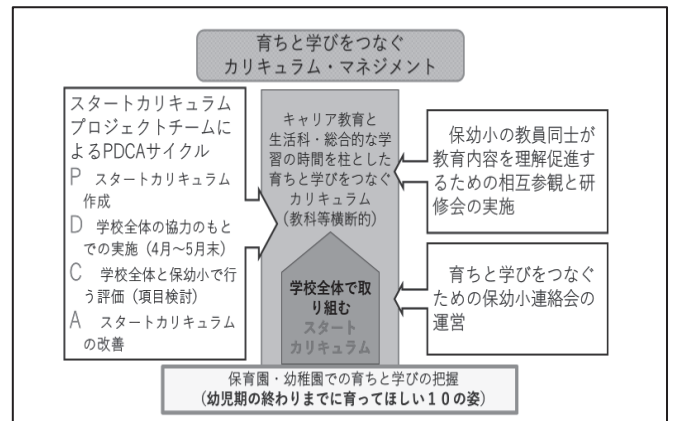


図2 研究構想図

5 仮説説明のための具体的方策

- (1) P段階：スタートカリキュラム作成のための情報収集
 - ①保幼小連絡会の実施の工夫
 - ②小学校教員による園訪問や園児の観察
- (2) D段階：学校全体での共通理解と協力実施のための情報提供
 - ①スタートカリキュラムの全体研修会
 - ②指標を活用した学校全体で取組
- (3) C段階：保幼小で連携した評価活動
 - ①保育園・幼稚園の職員による育ちの見取り
 - ②スタートカリキュラムPT研修会
 - ③調査結果の分析
- (4) A段階：保幼小合同で改善点を探る合同研修会を計画及び実施
 - ①保幼小合同研修会
 - ②育ちと学びをつなぐカリキュラム案の作成

6 研究の実際

- (1) P段階：スタートカリキュラム作成のための情報収集

次年度入学児童のスタートカリキュラムを作成するために、園児の育ちと学びを理解することが重要となる。そのために、スタートカリキュラムPTは、保育園・幼稚園それぞれの保育課程・教育課程の面と、子ども個別の配慮面から情報収集を行った。

①保幼小連絡会の実施の工夫

これまでの保幼小連絡会では、低学年の教員が各保育園・幼稚園からの聞き取りを行うことに留まっていた。そこで、スタートカリキュラムPTが育ちと学びをつなぐことを意識した保幼小連絡会を実施するように改善した(表2)。

表2 保幼小連絡会の改善

H29年度までの保幼小連絡会		
第1回	5月	・入学児童の授業参観 ・個別の学校適応についての情報交換
第2回	2月	・次年度入学児童についての引継ぎ



H30年度以降の保幼小連絡会		
第1回	5月	・入学児童の授業参観 ・スタートカリキュラム終了時の育ちの見取りと情報交換
第2回	12月	・保育園・幼稚園の保育に関するアンケート実施 ・次年度入学児童の個別の引継ぎ
第3回	2月	・次年度スタートカリキュラムの説明 ・子どもの戸惑いを予測し、支援方法を情報交換

まず、2月に行われていた第2回保幼小連絡会を12月の実施にし、スタートカリキュラム改善や早い段階で子どもを支える保護者とつながることができるようにした。その際、保幼小連絡部会が中心となって、入学児童の情報や各園の保育内容の聞き取りを行うこととした。そのために、全学年から選出された教員と聞き取りを行う保育園・幼稚園の組み合わせを考え、配置をしていった。保育内容の聞き取りに関しては、カリキュラム部会が作成した幼児期の保育に関するアンケート、特別支援・地域連携部会は個別の聞き取りや園訪問につなげることができるように、聞き取りシートを準備した。このことで、全職員の意識へとつなげていくきっかけとなった。

また、第3回保幼小連絡会では、入学後の子どもの戸惑いに着目したツール「とまどいマトリクス」善野(2012)を使って、次年度入学の児童について、より詳細に理解していく機会とした。保育園・幼稚園の職員が現1年生の最終の姿を観察した後、次年度入学してくる子どもの小学校生活の中での戸惑いや不安を予測していくことで、小学校側の受け入れの準備を、より具体的にしてい

くことができると考えた。表3は、今年度入学児童のために作成したものである。入学後に、保幼小が共有して評価できるような指標にしていくこともできた。

表3 今年度入学児童のとまどいマトリクス

学びの基礎力	柱	とまどいの事例と要因	①時間	②空間	③人間	④もの	⑤技能	⑥心情
精神的な自立	人とのかわり	・自分の思っていることをはっきりと伝える。(初めての人や場所) ・しっかりと話を聞いて理解する。	○	○	○	○	○	○
	協同	・自分の考えを出して、友達のと調整する。	○	○	○	○	○	○
生活上の自立	生活	・荷物の多さへの対応 ・机の中などの整理整頓 ・トイレ(和式への対応、行くタイミング) ・靴の脱ぎはき(靴箱での座り込み)	○	○	○	○	○	○
	規範意識	・幼稚園・保育園と学校のきまりの違い	○	○	○	○	○	○
学びの自立	学び	・文字への興味関心(読める子と読めない子) ・苦手なものへの挑戦意欲	○	○	○	○	○	

②小学校教員による園訪問や園児の観察

小学校教員が入学前に園児を直接観察できるように、園訪問や学校体験、給食体験などがある。これらの機会は、保護者に学校説明会を行っている時間を利用し、園児と5年生とを会わせたり、低学年の授業に参加できるようにしたりして、児童と園児の交流を位置づけている。

また、中学校ブロック内にある保育園・幼稚園に関しては、給食体験を受け入れていった。このことは、小学校側の教員が、園児の行動も直接観察していくことができ、保育園・幼稚園での支援の仕方にも触れることができた。

しかし、入学児童が全員参加できることは難しく、入学前に小学校の教員が様子を見るには、11月の就学時健診や1月の園訪問を有効に活用していく必要があることがわかった。

(2)D段階：学校全体での共通理解と協力実施のための情報提供

①スタートカリキュラムの全体研修会

表4 全体研修会の概要

期日：平成31年4月4日
対象：全職員
内容：これからの保幼小中連携・接続の在り方 ～学校全体で取り組むスタートカリキュラムについて～

スタートカリキュラムは4月からの実施のため、新しい職員体制になった年度当初に全体研修会を実施して、見直したスタートカリキュラムについての共通理解を図ることが重要となる。そのために、PTが全体研修会において、P(作成)段階で集めた情報を提供し、実践に生かしていくことができるようにし、入学式前までに新1年生への支援の在り方を学校全体で考えていった。

表5 研修後の感想（一部抜粋）

（低学年担任，教職7年目）
・保幼でつけてもらった力を，小学校ではつなげてさらに伸ばしていく必要があると感じた。

（中学年担任，教職10年目）
・スタートカリキュラムは，幼保と1年をつなぐためのカリキュラムと思っていたが，全学年が関わり合う必要があると分かった。

（高学年担任，教職31年目）
・保幼でどんな取り組みをしているのかに目が向くようになった。

（専科，教職10年目）
・スタートカリキュラムは，低学年の先生が担当するものというイメージであったが，全職員で意識するものというふうに変った。

スタートカリキュラムは，小学校の土台として学校全体で考える必要があるということ，ほとんどの教員が理解していた。特に，今年度異動してきた教員は，在籍校のスタートカリキュラムの「3つの自立」との繋がりや幼稚園・保育園の具体的な取組にも興味を示していた。

②指標を活用した学校全体での取組

全体研修会において，第3回保幼小連絡会で作成した指標をもとに，スタート期の教室環境や支援の方向性を提案していった。このことは，他学年の担任がスタート期の子ども達への関わり方を共有していたことが生かされ，より積極的に関わる姿へと変容が見られた。1年担任だけでなく，6年担任が，1年生のできることを尊重した関わり方を，6年児童にモデルとして示す姿があった。

また，1年生の教室では，保育園・幼稚園で経験したことを生かして，学びの基礎力である3つの自立「生活上の自立」「精神上的自立」「学びの自立」を促す関わりをする姿が見られた。このことは，1年生の廊下掲示板上にスタートカリキュラムの実際として掲示物を作成し，保護者にも伝えるようにした。

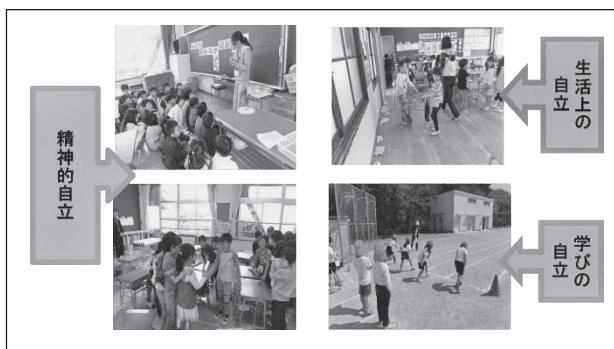


図3 スタートカリキュラムの実際を紹介した掲示物（抜粋）

(3) C段階：保幼小で連携した評価活動

①保育園・幼稚園の職員による育ちの見取り

スタートカリキュラム終了時の児童の姿を，保育園・幼稚園の職員とともに評価していくことが，育ちと学びをつなぐことになると考え，PTでは評価指標を作成し，実施していった。保育園・幼稚園の職員が1年生の授業を参観できる第1回保幼小連絡会において，自園を卒園した児童を中心に育ちの姿を見取り評価できるようにした。そのためにPTでは，保幼小で共有しているスタートカリキュラムの柱にそって，授業参観で児童の育ちを見る視点を，表6のように項目を作成した。

表6 授業参観で児童の育ちを見る視点

人のかかわり(精神的な自立)について
① 自分の思いや考えを，先生や友達に伝えていますか。
② 先生や友達の話，注意を聞いて聞こうとしていますか。
③ 学級の友達と一緒に活動することを楽しんでいますか。
④ 友達にやさしく声をかけたり，助けたりしていますか。
⑤ 友達のいいところに気付くことができますか。

学校生活の様子(生活上の自立)について
① 学級の中で，安心して生活できていますか。
② 自分の身の回りことは，自分でできていますか。
③ 挨拶や返事ができていますか。
④ 学校できまりや約束を守ろうとしていますか。
⑤ 時間を守り，見通しをもって行動できていますか。

学びに向かう力(学びの自立)について
① 興味・関心をもって学習に取り組んでいますか。
② 自分なりに考えて，取り組むことができますか。
③ 最後まであきらめずにやり遂げようとしていますか。
④ 苦手なことにも挑戦しようとしていますか。
⑤ これまでの経験を生かして解決しようとしていますか。

②スタートカリキュラムPT研修会

今年度からスタートカリキュラムPT研修を定期開催できるように年間計画に位置付け，実施している。

表7 第2回スタートカリキュラムPT研修の概要

期日：令和元年6月6日
対象：スタートカリキュラムPT（7名），研究者
内容：保幼小連絡会の報告
スタートカリキュラム終了時の実態調査について

保幼小連絡会後のスタートカリキュラムPT研修会では，保育園・幼稚園の職員の見取り調査の報告とともに，小学校でのスタートカリキュラム終了時の児童の実態調査をどのようにしていくかを話し合った。カリキュラム部会から，「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」から分析できるように，調査項目の提案があった。「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」とは，『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』『小学校学習指導要領』で共通に示された保幼小接続期で共有している姿である。この提案を受け，保幼小連絡部会と特別支援連携部会からは，自己評価の実施時期が，1年生の6月初旬ということや内容理解の個人差も考えられることもあり，1年生の自己評価

だけでいいのかという話し合いとなった。

そこで、1年担任の見取りと保護者が捉えている子どもの育ちも合わせて見ていき、より多角的に子どもを理解していくことが、スタートカリキュラムの評価・改善につながると意見がまとまった。保幼小連絡部会が中心となって、「生活習慣に関する設問」「学校生活や家庭学習に関する設問」「学びに向かう力に関する設問」「親の関わりに関する設問」の4つの観点から保護者アンケートを作成し、実施することとした。分析する上で、児童の自己評価と保護者アンケートの関連性をみることができるよう、関連項目を整理した(表8)。

表8 自己評価と保護者アンケートとの関連項目

Table with 3 columns: 幼児期の育ちと学び10項目, 自己評価項目, 保護者アンケートとの関連項目. Rows include categories like 健康な心と体, 自立心, 協同性, etc.

③調査結果の分析

1年生の自己評価による実態調査では、図4のような結果が得られた。

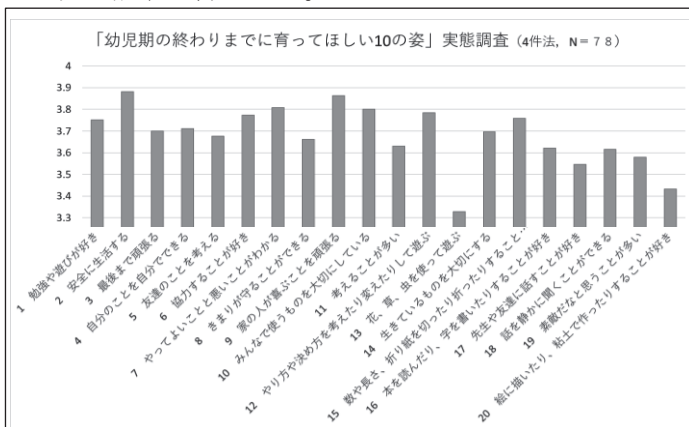


図4 1年生の自己評価結果(R1.6月)

質問項目2「安全に生活する」、7「やってよいことと悪いことがわかる」、9「家の人が喜ぶことを頑張る」、10「みんなで使うものを大切にしてい

る」において、3.8を超えると高得点が見られた。このことは、小学校生活においても、保育園・幼稚園などの集団生活で大切にしていることは同じであるという1年生への関わりをしてきたことや、保護者の関わりにおいても、気を付けて関わっていることが推察された。

一方、得点が低くなっているのは、『自然との関わり・生命尊重』に関する設問である13「花、草、虫を使って遊ぶ」と『豊かな感性と表現』に関する設問である20「絵を描いたり、粘土で作ったりすることが好き」という項目である。この結果は、個人の苦手さや経験の大小などが影響していると考えられる。個人の興味関心の広がりや、スタートカリキュラム以降の1年生のカリキュラムの中での支援の在り方が明らかになった。

なお、本調査結果は、保育園・幼稚園と共有することで、スタートカリキュラムの評価・改善だけでなく、保育園・幼稚園のカリキュラムの評価・改善に生かしていくこととした。

(4) A段階：保幼小合同で改善点を探る合同研修会を計画及び実施

①保幼小合同研修会

実践を評価した結果をもとに、保幼小合同で改善点を探る合同研修会を計画及び実施し、育ちと学びをつなぐカリキュラム・マネジメントへとつないでいく。そのためにも、保幼小合同研修会において、保幼小が共有しているスタートカリキュラムと幼児期の終わりまでに育てたい10の姿の繋がりを捉え、整理していくこととした(図5)。

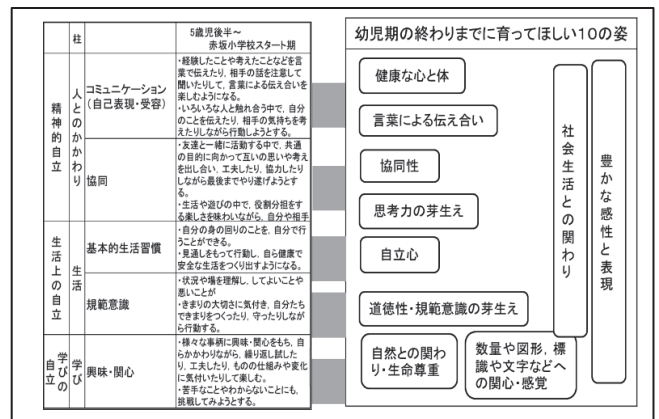


図5 スタートカリキュラムと『幼児期の終わりまでに育てたい10の姿』の整理

表9 保幼小合同研修会の概要

期日：令和元年7月21日
対象：全職員、中学校ブロック内の保育園・幼稚園
内容：保幼小接続カリキュラムと幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿について
保幼小相互理解のワークショップ

7 全体考察

(1) 教員の意識の変容

学校全体で保幼小接続に関する研修として、スタートカリキュラムの共通理解をする年度当初の研修会と保幼小合同での夏期研修会を実施したことで、スタートカリキュラムに関する理解度は高まっている(表10)。

表10 スタートカリキュラムの理解度の変容

4件法, N=18	研修前 (4月)	研修後 (8月)
低学年	2.4	3.6 ↑
中学年	2.8	3.4 ↑
高学年	2.0	2.6 ↑
専科・ 特別支援学級	3.2	3.7 ↑

表11 合同研修会での学びの分類(小学校教員)

N=16	園児の具 体的な姿 の理解	各段階で 育てたい 力	具体的な 指導内容	教師の 支援・教材 開発	保幼小 連携の 重要性	何を繋い でいくかの 具体
小学校	2名 (12.5%)	1名 (6.3%)	5名 (31.3%)	3名 (18.7%)	2名 (12.5%)	3名 (18.7%)

特に、スタートカリキュラムに対する理解とともに、合同研修会で具体的にどんな学びを高めていたかを分類したところ(表11)、保育園・幼稚園の指導内容や教師の支援などであった。スタートカリキュラムをもとに、「幼児の終わりまでに育ててほしい10の姿」を手がかりに子どもの育ちと学びを保育園・幼稚園の職員と共有していく合同研修会は、保幼小の相互理解を深めていくことができることがわかった。

(2) カリキュラム改善の方向性

1年生の自己評価の集計表を個別に見ていったところ、質問項目3「途中であきらめず、最後までがんばれる」や項目4「自分のことが自分でできる」のどちらかが低くなっていた(表12)。

表12 1年生自己評価集計表(一部抜粋)

児童 番号	3 最後まで頑張る	4 自分のことを 自分でできる	11 考えること が多い
⑫	4	3	4
⑬	4	2	2
⑭	4	4	3
⑮	1	4	2
⑯	2	4	2
⑰	2	1	4
⑱	3	2	2

ベネッセ教育総合研究所の縦断調査からも、幼児期から児童期にかけて、粘り強くがんばる力を育むことは、小学校低学年での「自分から進んで勉強する」といった学習態度や小学校高学年の思考力を伸ばすことが明らかになってきている。そこで、在籍校のカリキュラム改善の方向性として、

児童の探究を尊重し、思考を促す関わりをしていくことで、がんばる力を育てていくことに焦点化された。

8 成果と課題

【成果】

- スタートカリキュラムPTをPDCAサイクルに沿った組織運営し、全体研修会の実施や1年生を迎える準備を提案していくことで、学校全体で取り組む意識が高まった。
- 保幼小で連携した評価活動や保幼小合同研修会を実施したことで、育ちと学びをつなぐカリキュラム案ができた。

【課題】

- 2学年以降のカリキュラムが、1学年の育ちと学びをつないだ教科横断的なカリキュラムとして見直していく。
- 保幼小で連携した評価活動は、小学校だけがするのではなく、保幼小それぞれのカリキュラムの改善につながる研修体制にしていく必要がある。

主な引用・参考文献

- 文部科学省 国立教育政策研究所 2015 スタートカリキュラム スタートブック
 文部科学省 2015 幼児教育実態調査
 福岡市教育委員会 2019 保幼小中連携教育推進の手引き
 田村 知子 編著 2011 実践カリキュラムマネジメント ぎょうせい
 渡邊 恵子 2017 幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究 国立教育政策研究所報告書
 松寄洋子 2018 幼児教育の学びを生かしたスタートカリキュラムの実践 千葉大学教育学部研究紀要第66巻 第2号
 善野 八千子 2012 幼少接続期におけるカリキュラム開発Ⅲ 紀要, 43, 73-85
 東京教育研究所 2019 生活科を核とした資質・能力の円滑な接続を目指して 東研報告書No.310
 ベネッセ教育総合研究所 2019 幼児期から小学生の家庭教育調査・縦断調査
 田村 学 編著 2017 カリキュラム・マネジメント入門 東洋館出版社
 高櫻 綾子 編 2019 子どもが育つ遊びと学び～保幼小の連携・接続の指導計画から実践まで～ 朝倉書店

謝辞

本研究をまとめるにあたり、研修機会を与えていただき、ご支援・ご協力いただきました福岡市教育委員会に御礼申し上げます。また、在籍校の諸先生方をはじめ、調査関係の保育園・幼稚園の先生方にも、多大なるご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げます、謝辞と致します。